

学童期の発達段階を考慮した「給食の時間における食に関する指導」の検討（第二報）

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 静岡大学学術院教育学領域 公開日: 2019-12-24 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 竹下, 温子, 村上, 陽子 メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.14945/00026968

学童期の発達段階を考慮した

「給食の時間における食に関する指導」の検討（第二報）

Consideration of school-lunch instruction for children on the developmental stages

竹下 温子*、村上 陽子*

Haruko TAKESHITA and Yoko MURAKAMI

（令和元年 12 月 2 日受理）

ABSTRACT

Instruction on food during school-lunch is generally performed by homeroom teachers. The instruction causes many problems. The purpose of this study is to investigate the academic positioning and instruction system about the instruction on food during school lunch. To better understand the current situation, we conducted a questionnaire survey on students in home economics who aspire to be teacher and are knowledgeable about food. It is evident from the questionnaire survey that the students seem to understand insufficiently not only the instruction on food during school lunch but its method for children at developmental stage and a significance of the habitualization. It also became clear that the depth of understanding the method of the instruction on food during school-lunch is hardly influenced by having experience of instructing or observing lunch hour during teaching practice. It is suggested that the instruction for children on developmental stages be further studied. Therefore, we could contribute to establish the new curriculum for teacher-training courses.

1. 緒言

平成 17 年に食育基本法が制定され、同年、栄養教諭制度も始まり、学校現場での食育の重要性が叫ばれてから久しい。しかしながら、現在も栄養教諭が十分に配置されているとは言い難い状況下で、学校給食を「生きた教材」とした食育への期待と推進は増すばかりであり、理想と現実が乖離している状況である。一方、栄養教諭が在籍しない小学校では食育の推進を学級担任が一手に請け負う形になっており、多くの課題も挙がっている^{1,4)}。

食育基本法により一層注目を集めるようになった「食に関する指導」ではあるが、それ以前にも、給食指導を含む特別活動などの領域や教科を通して食に関する指導は行われてきた⁵⁾。

不川は、学習指導要領には学校給食の具体的な指導は示されていないことから、文部科学省が発行している学校給食指導の手びき書の内容も含め検討している。昭和 37 年に発行された『学校給食指導の手びき（小学校編）』には、学校給食の指導は「給食時」に実施する指導であることが明確化され、全教師が参加し協力する体制を整え、正しい理解と関心を持って積極

*家庭科教育系列

的に指導にあたる⁵⁾などが記載されていることを明らかにしている。これに加え、「教師は児童と食事をともにする」ことや「個別指導に配慮し、保健衛生に留意しなければならない」、「根気の良い反復指導を行う」、「楽しい食事の雰囲気をこわさない」などの説明がなされ、指導上の留意事項として衛生や安全に努めること、食事の作法を身に付けさせること、栄養の理解、食べ物の好き嫌い、咀嚼、児童の積極的な参加、個人差に応じた指導などの8つの項目が示されている。さらに昭和59年に発行された『新学校給食指導の手びき一思いやりの心とたくましい体づくりを目指して一』には、毎日繰り返される給食の体験は「生きた教材」としての役目を果たすことや、教師自身が食事に対して正しい共通認識を持ち、学校給食の特性に十分に留意して適切に指導することが大切であること⁵⁾などが記載されており、食育基本法が始まる20年前からすでに学校給食の指導について、「食に関する指導」が具体的に明示されていたことがわかる。

しかし、現在も学級担任が行っている給食の時間における食に関する指導について、多くの課題が挙がっている。その理由に、学校給食について学習指導要領に詳細な記載がないことや^{1,2,5)}、食育に関する研修の減少と教員各位の給食指導への認識のずれ⁶⁾、また学級担任業務の多忙さ²⁾などがある。

新保(2017)らは、学級担任が参考にしている給食指導法について検討しており、学級担任自身が家庭や小学校で受けた教育を参考にしている者が大半であり、『食に関する指導の手引』を参考にしている者は9%であったことを報告している¹⁾。つまり、各教員の食に対する認識や知識、それらを構築するための学びの場や時間はいずれも不十分であるといえる。さらに、教員養成課程の現状と学びの問題点を指摘している研究は数多く存在している⁶⁻⁸⁾。これらのことから、国が一丸となって目指す体系的な食育は、いつまで経っても理想論から抜け出せない状況にあるといえる。

そこで我々は、給食の時間における食に関する指導について教員養成課程での新たなカリキュラム化を目指し、学問的な位置づけや指導体制を検討していく。本稿では、まず、食に関する知識のある家庭科教育専修の学生で、教育実習経験済みの3、4年生を対象にアンケート調査を行い、発達段階を考慮した給食の時間における食に関する指導について、教員養成課程の学生の知識や捉え方の現状を把握する。さらに文部科学省の「食に関する指導法」の発達段階における指導例や、発達段階に着目した食に関する研究事例から、学童期の発達段階に合わせた「給食の時間における食に関する指導」について大学で学んでおくべき指導内容を検討することを目的とした。

2. 給食の時間における食に関する指導について

給食の時間における食に関する指導については、食に関する指導の手引にて詳細に示されている。平成22年に発行された『食に関する指導の手引ー第1次改定版ー』においては、「給食指導」は食に関する指導の目標を達成するために、毎日の給食の時間に学級担任が行う食に関する指導であると明記されていた。表1に示すように、◎部分が給食指導を通して身に付けることができる食に関する指導の目標であり⁹⁾、特に給食指導を通して「社会性」が育まれることを目標としている。次に、平成31年3月に発行された『食に関する指導の手引ー第2次改定版ー』では、給食の時間における食に関する指導が、「給食指導」と「食に関する指導」の2つに明確に区分され、前者は給食の準備から片付けまでの一連の指導と位置付けられ、市町村

や学校でのマニュアル作成や、学校全体で系統立てた指導ができるように取り組むことが推奨されており、主に学級担任が指導を行うとしている。また、後者の「食に関する指導」は学校給食の献立を通じて、食品の産地や栄養的な特徴の学習、教科の学習内容との連携など「献立」を教材として行う指導である。これも主に学級担任が行うが、担任が求めれば栄養教諭は資料を提供したり、直接指導したりするなど担任と栄養教諭との連携した指導が求められている¹⁰⁾。

さらに、給食の時間に行われる食に関する指導は、学校における食育の「食に関する指導」の中心的役割を担うものとして明記されており、非常に重要な位置づけであることが示されるとともに、その指導目標を発達段階ごとに示している（表3）。

『食に関する指導の手引—第2次改訂版—』によって、給食の時間における食に関する指導は、わかりやすく整理され、栄養教諭の関わり方も示された。しかし、給食の時間における「給食指導」と「食に関する指導」はいずれも学級担任が中心となり行うことに変わりはない。加えて、学級担任がこれらすべてを個人で把握するには、学ぶべき内容が複雑で多岐に渡っている。学級担任が食に関する指導の目的や内容を理解し、子供の実態に合わせた指導力を有するためには、教員養成段階での体系的な学びが必要である。さらに、学童期の発達段階を考慮した指導内容や指導目標を明確に示しておく必要がある。

3. 発達段階を考慮した給食の時間の指導項目の整理

ここでは、食に関するそれぞれの発達段階を考慮した指導例（厚生労働省、文部科学省）や、発達心理学から学ぶ学童期における社会性や集団性の獲得と個の発達の学びについて触れ、給食の時間の指導項目を発達段階的に整理していく。

3.1 厚生労働省が掲げる食を通じた子どもの健全育成

厚生労働省は、平成16年の『楽しく食べる子どもに』の報告書の中で「食を通じた子どもの健全育成」を掲げ、子どもが広がりをもった「食」に関わりながら成長し「楽しく食べる子ども」になることを目指している¹¹⁾。これらの育成の中で、発育・発達過程における主な特徴を示し（表2）、配慮すべき側面として、「心と身体の健康」「人との関わり」「食の文化と環境」「食のスキル」を挙げている。厚生労働省は、学童期と思春期については、身長成長速度が最大になる時期が早くなっていること、その個人差も大きいことを理由として、区分を明確にできな

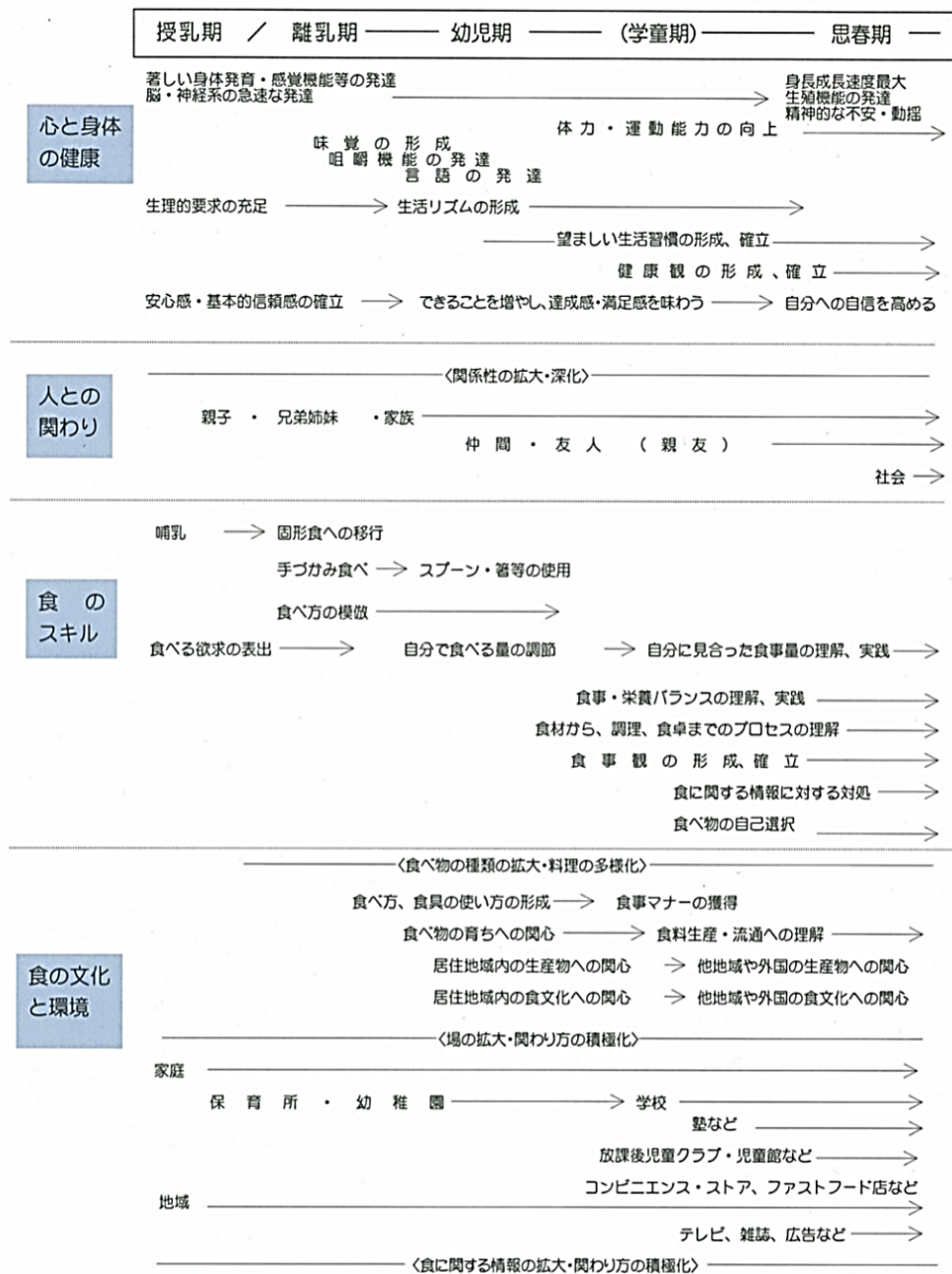
表1. 給食指導を通して獲得する食に関する指導の目標

		食に関する指導の目標					
		食事の重要性	心身の健康	食品を選択する力	感謝の心	社会性	食文化
給食の時間における食に関する指導の内容	① 楽しく会食すること （ア）食事のマナーを身に付け、楽しく会食することができる。	◎			◎	◎	◎
	（イ）様々な人々との会食を通して人間関係を深める。					◎	
	② 健康に良い食事のとり方 （ア）食品の種類や量が分かり、栄養のバランスの取れた食事のとり方が分かる。	○	◎	◎			
	（イ）日常の食事の大切さが分かり、健康に良い食事のとり方を身に付ける。	○	◎	◎			
	③ 食事と安全・衛生 （ア）安全・衛生（手洗いなど）に留意した食事の準備や片づけができる。		◎	◎			
	（イ）協力した選別や配膳が安全にできる。					◎	
	④ 食事環境の整備 （ア）食事にふさわしい環境を整え、ゆとりある落ち着いた雰囲気での食事ができる。					◎	
	（イ）適切な食器を利用して、献立にふさわしい盛り付けができる。					◎	◎
	（ウ）環境や資源に配慮することができる。					◎	
	⑤ 食事と文化 （ア）郷土食、行事食を通して食文化について関心を深める。						◎
	（イ）地場産物を通して、地域の食糧の生産、流通、消費について理解を深める。			○	○		○
	⑥ 勤労と感謝 （ア）みんなで協力して自主的に活動する。					◎	
	（イ）感謝の気持ちをもって食べることができる。				◎		

文部科学省：『食に関する指導の手引』（平成22）を参考に作成

いとしつつも、各発達段階においてわかりやすい目標を定めている。この中で学童期については、「食の体験を深め、食の世界を広げよう」という目標を掲げ、「1日3回の食事や間食のリズムが持てる、食事のバランスや適量がわかる、家族や仲間と一緒に食事作りや準備を楽しむ、自然と食べ物との関わり、地域と食べ物との関わりに関心を持つ、自分の食生活を振り返り、評価し、改善できる」など、学童期に獲得すべき5つの学びも示されている¹¹⁾。

表2. 発育・発達過程に係る主な特徴



出典：厚生労働省『楽しく食べる子どもに』平成16年報告書より引用

3.2 文部科学省が示した「食に関する指導」の発達段階における目標

文部科学省は、平成31年に発表した『食に関する指導の手引―第2次改訂版―』で、発達段階に応じた指導の目標（例）について具体的に示している（表3）。この表から、それぞれの教科とのつながりも考慮されていることがわかる。

表3. 発達段階に応じた食に関する指導の目標（小学校）

学年	①食事の重要性	②心身の健康	③食品を選択する能力	④感謝の心	⑤社会性	⑥食文化
低学年	○食べ物に興味・関心をもち、楽しく食事ができる。	○好き嫌いせずに食べることの大切さを知ることができる。 ○正しい手洗いや、良い姿勢でよく噛んで食べることができる。	○衛生面に気を付けて食事の準備や後片付けができる。 ○いろいろな食べ物や料理の名前が分かる。	○動物や植物を食べて生きていることが分かる。 ○食事のあいさつの大切さが分かる。	○正しいはしの使い方や食器の並べ方が分かる。 ○協力して食事の準備や後片付けができる。	○自分の住んでいる身近な土地でとれた食べ物や、季節や行事にちなんだ料理があることが分かる。
中学年	○日常の食事に興味・関心をもち、楽しく食事することが心身の健康に大切なことが分かる。	○健康に過ごすことを意識して、様々な食べ物を好き嫌いせずに3食規則正しく食べようとする事ができる。	○食品の安全・衛生の大切さが分かる。 ○衛生的に食事の準備や後片付けができる。	○食事が多くの人々の苦労や努力を支えていることや自然の恩恵の上に成り立っていることが理解できる。 ○資源の有効利用について考える。	○協力したりマナーを考えたりすることが相手思いや楽しい食事につながることを理解し、実践することができる。	○日常の食事が地域の農林水産物と関連していることが理解できる。 ○地域の伝統や気候風土と深く結び付き、先人によって培われてきた多様な食文化があることが分かる。
高学年	○日常の食事に興味・関心をもち、朝食を含め3食規則正しく食事をとることの大切さが分かる。	○栄養のバランスのとれた食事の大切さが理解できる。 ○食品をバランスよく組み合わせることで献立を立てることができる。	○食品の安全に関心を持ち、衛生面に気を付けて、簡単な調理をすることができる。 ○体に必要な栄養素の種類と働きが分かる。	○食事にかかわる多くの人々や自然の恵みに感謝し、残さず食べようとする事ができる。 ○残さず食べたり、無駄なく調理したりしようとする事ができる。	○マナーを考え、会話を楽しめながら気持ちよく食事をすることができる。	○食料の生産、流通、消費について理解できる。 ○日本の伝統的な食文化や食に関わる歴史等に興味・関心をもつことができる。

出典：『食に関する指導の手引―第2次改訂版―』（H31）より引用

例えば社会科が始まる小学校中学年から④の感謝の心を育む指導において、「資源の有効利用について考える」と表記されており、牛乳パックのリサイクルやごみの分別を学ばせることを指導目標として定めやすくしていると捉えられる。同様に、②の心身の健康を育む指導目標では、小学校高学年に入ると、「栄養のバランスの取れた食事の大切さが理解できる」や、「食品をバランスよく組み合わせることで簡単な献立を立てることができる」とし、5年生から始まる家庭科の授業とのつながりが指導目標として明記されている。このように教科とのつながりを意識した指導目標が実行に移されることによって、はじめて、教科の学びが給食を通して児童自身の生活に生かされることになり、この繰り返しの指導が、児童の行動を変容させる。つまり、児童の生活の一部に各教科の学びが取り入れられて、学校給食が「生きた教材」となり得る。そのため、発達段階に応じた教科とのつながりを持った指導は非常に重要な位置づけとなる。

3.3 学童期の発達心理学

発達心理学の歴史を辿ると、小学生は情緒安定期と捉えられており、発達段階区分を見ても、学童期で括られているものが多い。田丸（2010）は、体格や興味、考えも違う小学校6年間で同一発達段階とみなすことには無理が生じるとし、ピアジェ、ヴィゴツキー、ワロン、それぞれの発達段階論の基礎にしている事実を見ていくと、学童期を必ずしも一つの発達段階として捉えておらず、学童期とは発達段階の対立と交替が露わな時期として捉えられていることがわかる¹²⁾としている。ピアジェは認知発達段階について、前操作期（2～7,8歳）、具体的操作期（7,8～11,12歳）、形式的操作期（12歳以降）に分け、同化、調節、均衡を繰り返すことで、ある世界を理解し適応していくとした。つまり、「給食の時間における食に関する指導」においても学童期の全学年を通して同一の指導が成り立つわけではなく、発達段階を考慮した学びや発達段階を理解した目標と指導が必要となる。児童は、それぞれの発達段階過程で、同化、調節、均衡の過程を経て食行動を適応・変容していくと考えられる。よって食に関する指導の目標に応じて、発達段階を考慮に入れて具体的な指導内容を検討する必要がある。

給食指導では、前述したように、「社会性」に関わる目標が非常に多い（表2）。そこで、幼児期から小学校高学年までの集団形成の特徴と規則の実行・意識の発達段階の特徴を表4に示した。鈴木（2018）が教員の初任者研修で活用される資料を検討し、学級経営の視点から給食時の指導が重要であることが主に記載されていた¹³⁾と報告しているように、給食は集団形成にとっても重要な位置づけとなる。そこでこれらの発達段階的な特徴も把握した上で、「給食の時間における食に関する指導」について発達段階を考慮し、その指導内容を整理していく。

表4. 規則実行・規則意識の発達と集団形成の特徴¹⁴⁾

	集団形成の特徴	規則実行の発達	規則意識の発達
幼 児 期		運動的・個人的段階 (2～5歳)	規則第1段階 (2～6歳) ・規則は強制的でない
小 学 校 低 学 年	【役割活動的集団・同好活動的集団】 ・単なる集合の段階、教師などへの依存が強い ・手伝いや仕事に積極的ににかかわる（係活動の芽生え） ・1対1の関係からグループ活動などの集団的なかわり ・身近なものや友達関係（離合集散の繰り返し）	自己中心性の段階 (5～7歳) ・一人遊びか、友達と遊んでも勝ち負けを決める 統一的な規則はない	規則意識の第2段階 (6～10歳) 【強制/他律の道徳性】 ・規則は大人から与えられるものであり、強制的かつ永久的と考える
小 学 校 高 学 年	【自発的・自治的集団・同好活動的集団】 ・男女やグループ間の意識化（同調性と反発・対立） ・活動体験による個性発揮と相互尊重（高学年の自覚） ・理論的な意見交換や自発的な問題解決力 ・下級生などの援助や学校行事などへの積極的参加	初期共同の段階 (7～11歳) ・友人間で勝ち負けを意識し始め、それを決めるための統一的な規則を制定しようとする 規則制定化の段階 (11歳～) ・前段階で始まった規則の制定が完了する段階	規則意識の第3段階 (10歳～) 【共同/自律の道徳性】 ・規律は相互同意に基づく 規範と考えるようになる ・規則は同意のもとで変えられる

引用：『児童心理学』サイエンス社の表を一部編集して作成

3.4 学童期の発達段階を考慮した給食の時間における食に関する指導内容の整理

現在、学級担任が行う「給食の時間における食に関する指導」には、多くの課題が挙がり、その原因の一つに学習指導要領に記載がないことが挙げられていた^{1,2,5)}。そこで本研究では、まず、「給食の時間における食に関する指導」について、発達段階を考慮しながら先行研究^{2,6)}を参考に指導内容の詳細を整理することとした（表5）。

「◎」は教員が積極的に指導に関与することが必要な項目とし、「△」は個別指導の必要性がある項目、さらに「＊」は子供の自主性を主とした指導項目とした。

その結果、ほとんどすべての項目で小学校1~6年生までの指導が必要であること、そのアプローチ法が発達段階によって異なることが示唆された。以下、ここでは小学校における給食の時間に行う指導の中でも「給食指導」に関する項目について発達心理の思考を踏まえながら、説明していく。

1) 小学校低・中学年を中心にした内容

①マナー、⑤安全・衛生の「手洗いうがい」、「身支度」、「安全な配食の仕方」、⑥教室の環境づくり、⑨感謝の気持ちは、主に低学年で指導していく内容である。表4に示した集団形成においても低学年は教師への依存が高く（教師主導期）、集団給食の規範を身に付けさせる時期ともいえる。小学校3年生までは全体的な指導を行いつつ、小学校4年生以降は、規範が守れない児童に対して個別に指導していく内容となる。クラスの雰囲気によっては、高学年になっても全体に指導を促す必要がある。

またマナーにおける箸の持ち方については、山内（2010）が、幼児期に伝統的な箸の持ち方を指導し習慣化させていくべきである¹⁵⁾としている一方で、伝統的な持ち方をしている若者の中で、39%が小学校で初めて指導を受けたとしていることや、箸の持ち方は10歳までに完了する¹⁵⁾との報告からも、低学年で、積極的に指導していきたい項目である。また、使いやすい箸の長さは手のひらの1.1~1.2倍とされ¹⁶⁾、箸の長さが伝統的な箸遣いの習得に関与すると考えられる。なかなか上達しない児童や持ちづらそうな子どもに対しては、使用している箸の検討を勧めるなど中・高学年になっても個人対応は必要になるだろう。

③偏食は、味覚機能や心理的な発達要素を踏まえて考えると、最も偏食に対する行動変容が可能な時期は、低学年と考えられる。味覚形成は10歳までに決まるとされ¹⁷⁾、それまでにいかに多くの食材や味に触れさせるかが鍵である。5~6歳になると、時系列的に物事をとらえることが可能になり、自尊心や自信をつける時期でもあり¹⁸⁾、新しいことにチャレンジする好奇心が旺盛で、苦手なものを克服しようと努力する時期でもありと考えられる。これらのことを踏まえ、低学年が、食わず嫌いや苦手意識を克服し、新たな自信へつなげることが最も可能な時期と捉えられる。また、古島（2006）は、教師からの称揚やクラスメイトとの献立についての会話によって、食べることへの意欲を高め、給食を残さず食べるという食行動にプラスの行動変容が見られたとし、「楽しく食べる雰囲気や食べることに集中できる時間の保証」といった食べる意欲を高める環境づくりを行うことが大切である¹⁹⁾としている。つまり、偏食を克服するには⑥の教室の環境づくりも小学校低学年にとって重要な指導目標となる。

10歳を越えてくると味覚の形成が決定し、嫌いな味への認識を変えるのは難しい。しかしながら発達心理学的側面として、中学年に入ると自己中心的な考え方から、他者への理解が広がる時期に移行するため、「感謝の心を育むこと」に注意を向けさせることで、残食や好き嫌いが改善できる可能性もある。そして高学年では、健康への影響も考えられるようになるため、家

庭科の授業と関連づけた指導が有効と考えられる。さらに、苦手な食材を自分で調理することにより、口にすることができるようになる可能性も含んでいる²⁰⁾。このように偏食については、発達段階によってアプローチを変えながら、学童期を通して、改善できるように努めたい内容である。

また、偏食の中に、「小食」や「残食」の内容も入ってきている。これらはいずれも給食の時間の短さや、⑦盛り付け・配膳の「盛り付け量」が影響している可能性がある。給食時間の食べる時間の確保に努めながら、低学年であれば、教員が主導して盛り付けを行うなどの対応が必要である。

2) 小学校高学年を中心にした内容

②会食は、文部科学省の『食に関する指導の手引』の発達段階的な指導目標から、小学校高学年でこの用語が確認されていることから、「同じ目的を持った仲間と食事をする」という捉え方が正しいと考えられた。ここで示す「会食」とは、学校給食の意義や目的を児童が理解した上で、積極的に自ら学校給食に参加するという意味が盛り込まれていると解釈できる。表 4 の集団形成の特徴として理論的な意見交換や自発的な問題解決力が身につくのは小学校高学年とされていることから、小学校 5, 6 年生で指導していきたい内容となる。給食をコミュニケーションの場として、意義や目的を持った会話を意識づけていくことが大切である。

3) 小学校低～高学年の全体を中心にした内容

④食べるスピードは、与えられた時間を逆算しながら行動する習慣をつける、つまり社会性を養うために必要な指導である。給食の時間は配膳や片付けも含めて 40 分と非常に短いため、食べる時間の確保に注力しながらも、給食の時間内に食べ終わるように促す必要がある。つまり低学年では、給食に集中できる環境を作るため、担任が食べる速さのコントロールと味わうことを指導する必要がある。高学年になると自分でスピードをコントロールできるようになるため²¹⁾、食べるスピードの速すぎる児童と遅すぎる児童を対象に、個別指導が必要となる。咀嚼については、特に中学年は乳臼歯から小臼歯への交換期にあたり、一時的に咀嚼能率の落ちる時期であるとされるため²²⁾、低学年に引き続いて給食時間の確保に努める必要がある。

⑤の安全・衛生の項目の「給食当番体調不良の確認・感染」と「食物アレルギー」については、低学年から高学年にかけて、教員が個別に対応していく必要のある指導の 1 つである。特に給食当番の体調不良の確認は、接触感染を起こすノロウイルスなどの感染予防のためにも全学年にわたって重要となる。また高学年は家庭科の調理実習をとおして、食品の扱い方と衛生について学ぶ時期でもあるため、教科と連携した指導で着実に身につけさせたい。

最後に食物アレルギーについては、家族、栄養教諭、養護教諭、と連携が取れるようにしておく必要があり、個別対応の中でも、特に注意しておきたい内容となる。

このように「給食指導」だけとっても指導内容は多岐にわたり、他教科および発達段階を考慮しながら指導内容のポイントを押さえていく必要がある。これらの指導内容を体系的に示していくこと、さらに教員養成段階から学んでいく必要があることがわかる。

表 5. 給食の時間における食に関する指導内容と発達段階を考慮した指導時期の提案

	指導項目	指導内容	低学年		中学年		高学年	
			1 学年	2 学年	3 学年	4 学年	5 学年	6 学年
給食指導に関する項目	①マナー	食器や箸の持ち方	◎	◎	○	△	△	△
		食事の姿勢	◎	◎	○	△	△	△
		食事中むやみに席を立たない	◎	◎	○	△	△	△
	②会食	食事にふさわしい会話					◎	◎
	③偏食	好き嫌い	◎	◎	○	△	△	△
		小食	○	○	◎	◎	○	△
		残食	○	○	◎	◎	◎	◎
	④食べるスピード	食べるスピード	○	○	○	○	△	△
		咀嚼	○	○	◎	◎	○	○
	⑤安全・衛生	手洗い、うがい	◎	◎	○	△	△	△
		身支度（給食着の役割）	◎	○	○	△	△	△
		食中毒					◎	◎
		安全な配食の仕方	○	○	○	○／＊	○／＊	○／＊
		給食当番体調不良の確認・感染予防	△	△	△	△	△	△
		食物アレルギー	△	△	△	△	△	△
	⑥教室の環境づくり	明るく和やかな食事の場	◎	◎	○	○	○	○
		楽しい雰囲気	◎	◎	◎	○	○	○
	⑦盛り付・配膳	盛り付け量	○	○	◎	◎	◎	◎
		盛り付け方法	◎	◎	◎	○	○	○
		配膳方法	◎	◎	○	○	○	○
	⑧給食当番・片付け		◎	◎	○／＊	△／＊	△／＊	△／＊
	⑨感謝の気持ち	食事のあいさつ	◎	◎	○／＊	○／＊	○／＊	○／＊
		命を頂いたことに	○	○	◎	◎／＊	○／＊	○／＊
		作った人（関わった人に）	○	○	◎	◎／＊	○／＊	○／＊
	⑩環境への配慮	資源の有効など			◎	◎／＊	○／＊	○／＊
食に関する指導	⑪食品・栄養バランス	色々な食べ物の名前が分かる	◎	◎	○	○	○	○
		栄養バランスの取れた食事の大切さがわかる					◎	◎
	⑫食文化	土地でとれた食べ物がわかる	◎	◎	○	○	○	○
		季節や行事にちなんだ料理があることがわかる	◎	◎	○	○	○	○
		地域の伝統は気候風土と深く結びつき先人によって培われた多様な食文化があることがわかる			◎	◎	○	○
		日本の伝統的な食文化や食にまつわる歴史に興味・関心を持てる			○	○	◎	◎

◎積極的に指導したい学年（機能性発達の面で配慮が必要や教科の関りなど配慮したい学年）

○指導する必要がある学年（習慣性が大事な指導項目や完全理解を伴わずとも指導したい学年）

△個別指導が必要な学年（すでに習慣性として身に付けて欲しいが、至らない場合）

＊自主性に任せることも必要な学年

4. 調査方法

本研究の目的は、発達段階を考慮した給食の時間における食に関する指導法を検討していくことにある。そこで、「給食の時間における食に関する指導」の発達段階的位置づけをどのように捉えているか把握するために、アンケート調査を行うこととした。

4.1 調査方法

調査は自記式質問紙法で行い、回答は無記名とした。調査対象者に質問紙を配布し、その場で回答してもらい、直ちに回収した。調査期間は 2019 年 7 月～8 月の間で、対象は教員養成課程家庭科教育専修の学生で、教育実習経験もある 3、4 年生（3 年生 14 名、4 年生 13 名）である。当該学生を対象とした理由は、小学校免許および中学校家庭科教諭 1 種免許を取得予定であること、将来、小学校の学級担任になる可能性があること、食の知識も習得していることが挙げられる。尚、小学生の学年と区別するために、大学生については、学年の前に「大学」、小学生の場合は「小学校」と表記した。統計処理はエクセル統計 2010 を用いた。

4.2 調査内容

実習期間中の給食指導および見学の有無とその内容、その際役に立った今までの知識・授業や、知っておきたかった内容などを含めた全 24 項目とした。本報告では、調査対象者が教育実習の経験を有していることから「小学校の給食指導について発達段階に合わせた指導を行うには、どの学年から指導すべきか、またその理由」について調査を行い、本稿で提案した「給食の時間における食に関する指導内容と発達段階を考慮した指導時期」（表 5）を参考にその正答率を求めた。さらに小学校での教育実習経験者を対象として、教育実習期間中の「給食指導および見学経験の有無」が上記正答率に及ぼす影響を分析した（小学校教育実習経験者：3 年生 7 名 4 年生 12 名）。この質問票で使用した給食指導の項目については、磯部（2017）らの「食に関する指導の手引き」により分類した給食の時間における食に関する指導項目²⁾を参考にし、給食指導以外の食に関する指導も含めた内容とした（本稿で取上げなかった質問項目、対象者の履修状況の詳細は本稿の第一報となる村上（2019）を参照されたい²³⁾）。

5. 結果および考察

5.1 学生が回答した発達段階を考慮した指導学年の分布

以後の図は、大学生が回答した指導すべき学年の分布割合を示す。横軸の枠線で囲まれた学年は、表 5 に本稿で提案した発達段階を考慮した指導すべき学年である。

1) 【マナー】について

【マナー】は大学 3 年生と比較して、大学 4 年生は有意に正答率が高かった。マナーは小学校 1～6 年生それぞれで学んでいく必要がある（表 5）。大学 4 年生の回答理由の多くは、「小学校低学年から徐々に教えていきたい」と記載していた。さらに「箸の正しい使い方は幼いころに習慣づけないとなおりにくい」や、「小学校低学年で基本的なことを教えることで、学校特有の集団での規律を意識できる」といった、習慣付けや発達心理学を考慮した回答が目立った。大学 3 年生では小学校高学年での指導を選択した者が約 3 割おり、「小学校中学年まではマナーを理解できない」「給食において優先順位を考えるとそこまで重要でない」と考えている者もいた。学校給食が家庭で行われるべき躰も担っていること、さらに発達段階で子供が取得できる能力が異なることなどが理解されていない回答も見られた。また、小学校低学年の 2 年生から指導を入れるとした者も 1 割程度おり、「小学校 1 年生は食べる楽しさを知ることが第一である」と

回答していた。

2) 【感謝の気持ち】について

次に、大学4年生が高い正答率（61.5%）を示したのが【感謝の気持ち】の項目である（図2）。「頂きます、ごちそうさま」といったあいさつに着目し、小学校1~6年生で行うと回答した者が多かった。大学3年生は7割が小学校1年生を対象としていたが、そのうち4割は「継続した指導は必要ない」と考えている様子が伺えた。また、「小学校以前に学ぶべきことであり指導する必要はない」や「生産・販売・職業まで理解するのは難しいから小学校高学年」といった回答もあり、全体の正答率を下げたと考えられた。

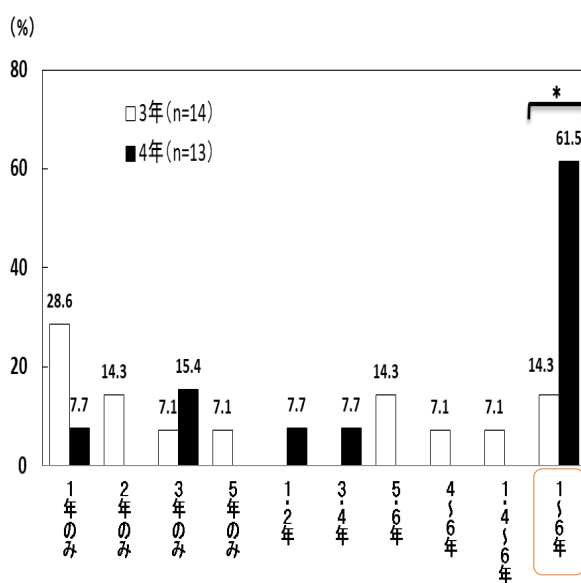


図1. マナーにおける回答分布率

（食に関する指導項目⑤社会性）

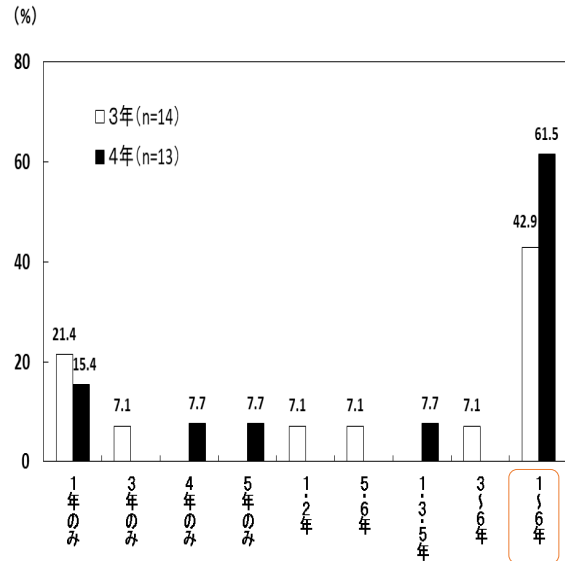


図2. 感謝のきもちにおける回答分布率

（食に関する指導項目③感謝のきもち）

3) 【安全・衛生】について

次に大学4年生の5割以上が正解した【安全・衛生】の指導についてみていく（図3）。

大学3、4年生ともに、「手洗い・うがい」などの基本的な衛生管理の事項を踏まえ、小学校1年生を対象と回答している者が多かった。しかし、正答率が大学3年生で低くなった。その理由は、発達段階に応じた指導の理解や繰り返し指導することが習慣化へ導くという認識が乏しいためと考えられる。また、大半の学生が、衛生面による安全性を重視していたが、給食指導は準備（運搬も含む）から片付けまでの一連の過程を含むため、重い食器を持つなど、怪我のリスクも高まる。このような環境リスクの安全について解答していた者は、各学

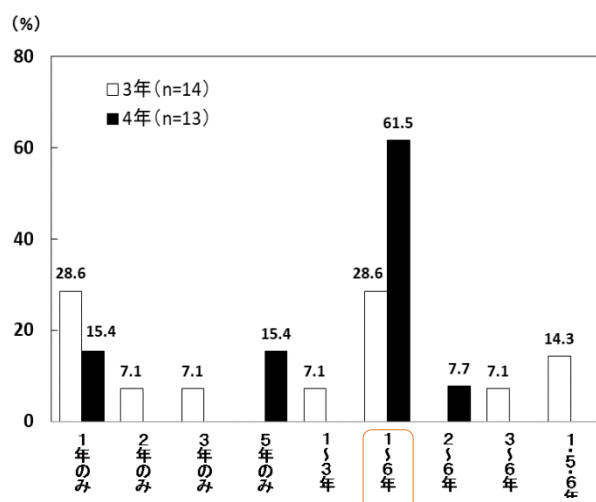


図3. 安全・衛生における回答分布率

（食に関する指導項目③食品を選択する力）

年1名程度であった。大学4年生の中には「安全・衛生は子供の命に係わるため常に気を配っておく必要がある」と回答している者が1名おり、リスク管理への配慮は個人差があると考えられた。また、小学校高学年での指導を選択した者はほとんどが家庭科の授業との関連、つまり、衛生的な指導を指摘していた。このことから、安全・衛生に対するリスク管理の視点は、教員養成課程における学びの中で、特に注意して指導していく必要があると考えられた。

4) 【盛り付け・配膳】・【食べるスピード】について

【盛り付け・配膳】の指導については大学3、4年ともに正答率の低かった(図4)。大学4年生は特に小学校低学年での盛り付け量の把握の難しさや、配膳時間を課題として挙げており、小学校中・高学年での指導を選択する者が多かった。大学3年生は、小学校低学年を選択する者が多かった。

さらに【食べるスピード】の指導については、小学校中学年から高学年を選択している者が多く、その回答理由として、「小学校低学年は、急かされることで給食が嫌いになる可能性や、必要な栄養素が取れなくても困るから」など食べるスピードの遅さを指摘している者が目立った。大学4年生の中には「あまりにも遅かったり、早かったりする場合は、個別に指導を行う」といった個別指導の可能性を示した正しい回答を導いた者もいた(図5)。

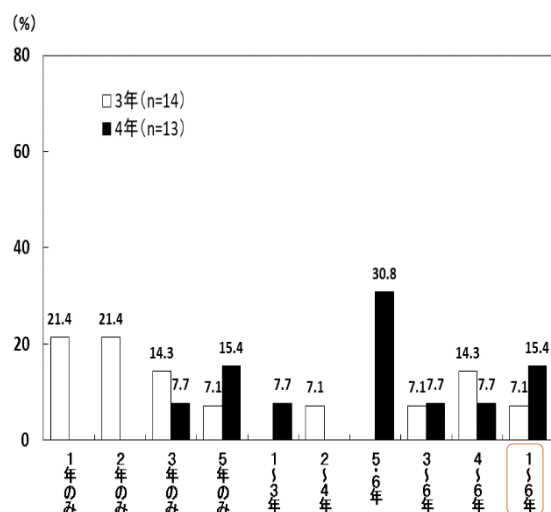


図4 盛り付け・配膳における回答分布率

(食に関する指導項目③食品を選択する力)

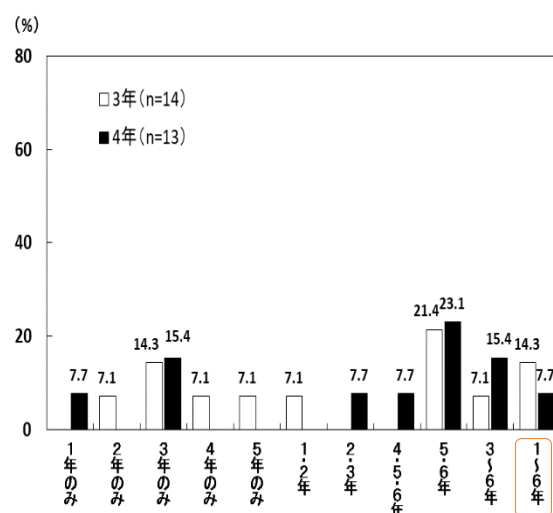


図5 食べるスピードにおける回答分布率

(食に関する指導項目⑤社会性)

5) 【会食】の項目について

【会食】の指導については、無回答が1割程度おり、「会食」という用語の解釈が難しかったことが伺える。正答率が低かった理由は「知っておかなくても給食には困らない」や「卒業前に校長先生と給食を食べる機会があったりするため」など、会食の意味を「目上の人と取る食事だけを指す」と誤解している者がいるためと考えられる。前述したが、文部科学省が示している、食

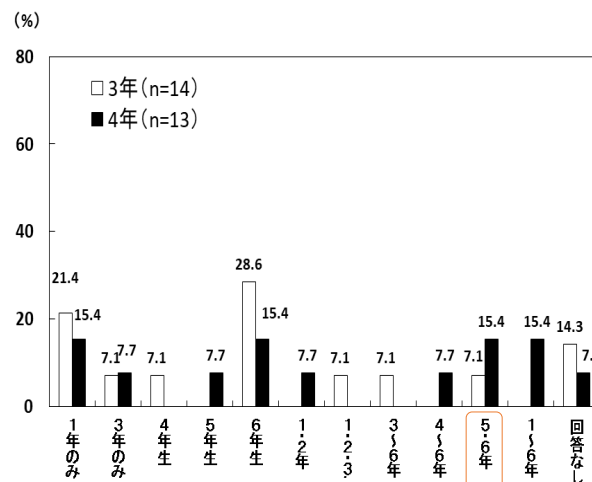


図6 会食における回答分布率

(食に関する指導項目⑤社会性)

に関する指導法の発達段階における指導例によると、「会食」という言葉が確認されるのは小学校高学年であった。つまり、ここで意味する会食とは、「人が集まってただ食事をする」という捉え方よりも、「目的をもって人が集まり食事をする」という捉え方が正しいと考えられる。そのため、小学校高学年は、学校給食の意義や目的を理解した上で、自ら参加する会食であると捉えた指導を積極的にしていく必要がある。

6) 【環境への配慮】について

【環境への配慮】の指導は、家庭科や社会科などの教科との連携を考えて、小学校高学年を選択する者が多かったが、正答は3～6年である（表5）。発達心理学の観点において、小学校中学年は、主観的な思考の延長として社会認識が発達する時期²¹⁾でもあるとされる。さらに文部科学省が示している食に関する指導法の発達段階における指導例にも「中学年で資源の有効利用について考える」という文言が入ってきており、発達段階を考慮すると、小学校中学年から行うことが適切であると考えられる。

7) 【偏食】の項目について

最も指導上注意が必要な【偏食】の項目は、約5割は「好き嫌いの矯正は幼いうちから行った方が良い」とし、小学校低学年を選択していた。また、約4割の学生は「栄養バランスについて理解できる小学校高学年が良い」と家庭科の授業と関連している回答をしており、体験を通して順応させていくか、脳の理解を伴った行動変容を促すかの違いが見られた。さらに、一部の学生に「小学校低学年では食べることの楽しさを教えたい」や「給食を嫌いにならないでほしいから」といった回答も見られた。古島は、学校給食における行動変容の有無は、他者とのコミュニケーションが円滑に図れているか否かにかかってくるとし、その実現には「楽しく食べる雰囲気や食べることに集中できる時間の保証」といった食べる意欲を高める環境づくりを行うことが大切であるとしており¹⁹⁾、この一部の学生の考えも非常に重要な視点となる。

偏食については、段階的なアプローチが必要であり、最も効果が高いと考えられるのは、味覚形成前の小学校低学年である。「味覚形成」という専門用語を用いて回答した学生は1名にとどまった。「1～6年」のように、継続的に指導していくことの重要性を認識していたのは、大学4年生が約4割と大学3年生よりも高かった。

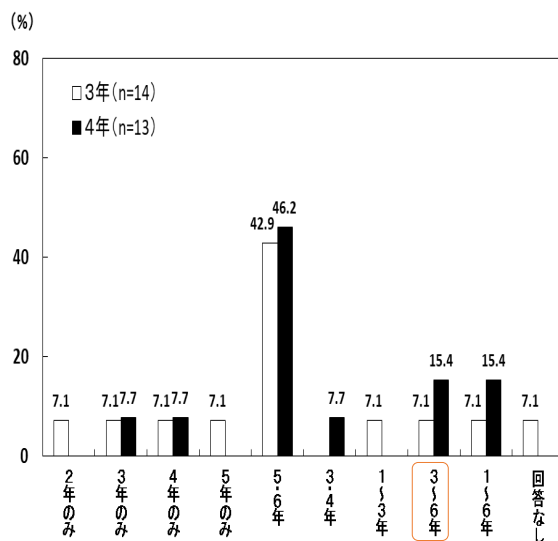


図7. 環境への配慮における回答分布率

(食に関する指導項目④感謝の心)

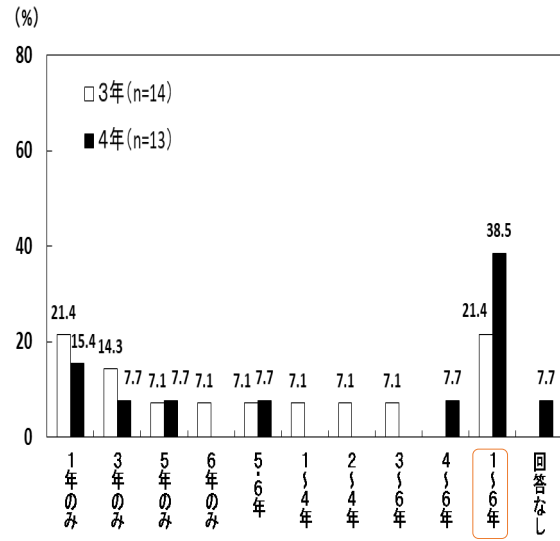


図8. 偏食における回答分布率

(食に関する指導項目②心身の健康)

8) 【給食の環境づくり】について

大学3年生の多くが「小学校1年生のみで指導する」と回答していた(図9)。これは、環境づくりの捉え方が、食事の雰囲気とまで捉えられず、「机の上を拭くや整えるといった」整理・整頓と捉えている結果と考えられた。ここで求められる環境づくりは、食事をとる雰囲気も含まれており、クラスの雰囲気づくり、つまり、学級経営も大きく関与する。そのため、1~6年を通した指導が必要となる。

9) 【給食当番・片付け】について

大学3年生で「小学校1年生のみ」と答えた者が5割を超え(図10)、当番の仕事や片付けが1年間で確実に身につくと考えていることが明らかとなった。給食当番については、児童の体調管理も教員が行うべき役割の1つであり、安全・衛生にもつながる重要な業務である。小学校高学年になっても、教員側が給食当番の体調チェックと当番の交代などの指導をしていく必要がある。

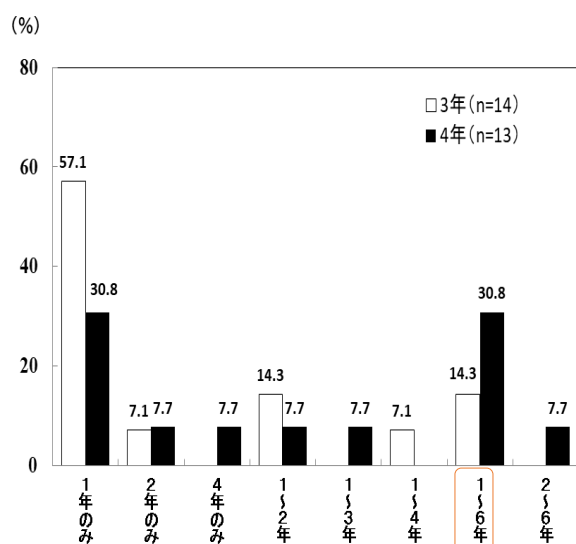


図9. 給食の環境づくりにおける回答分布率

(食に関する指導の項目③食品を選択する力)

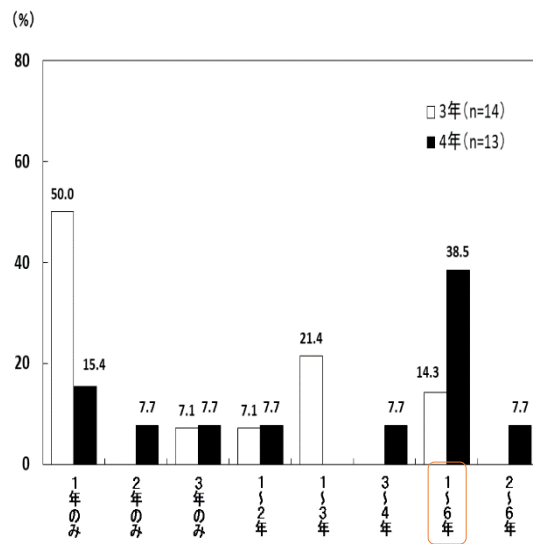


図10. 給食当番・片付けにおける回答分布率

(食に関する指導の項目⑤社会性)

10) 【食文化】【栄養バランス】について

最後に「給食の時間における食に関する指導」の中の「食に関する指導」の内容についてみていく。まず、【食文化】の指導では、大学3年生の正答率が0%であった(図11)。正答である小学校1~6年生を選択していたのは大学4年生でも15.4%であった。この要因として、家庭科の授業と関連付けて考えている者が多いと考えられ、大学生3、4年とも、小学校高学年の選択が目立った。小学校低学年であっても目の前の食品や料理を認識する力は備わっており、給食は地域の食品や郷土料理名を学ぶ格好の場である。食文化については、発達段階に応じて学ぶ内容に注意する必要があるが、小学校低学年から指導できる内容となる。

【栄養バランス・食品】についても、「小学校5、6年生に指導する」としていた回答が目立った(図12)。これも食文化と同様、家庭科の授業と関連付けて考えている者が多いためと考

えられる。このことから、それぞれの内容が発達段階的に学んでいく要素を含んでいることが理解されていないと言える。

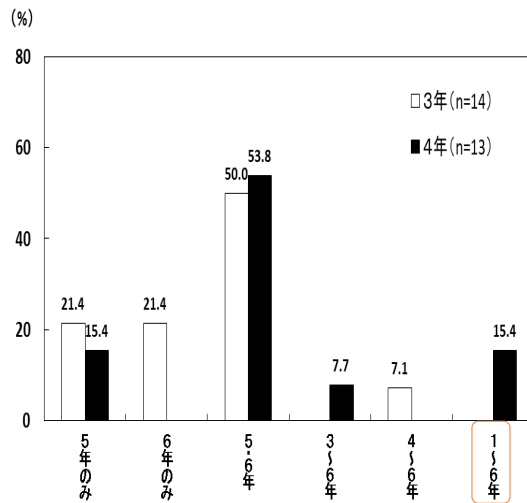


図 11. 食文化における回答分布率

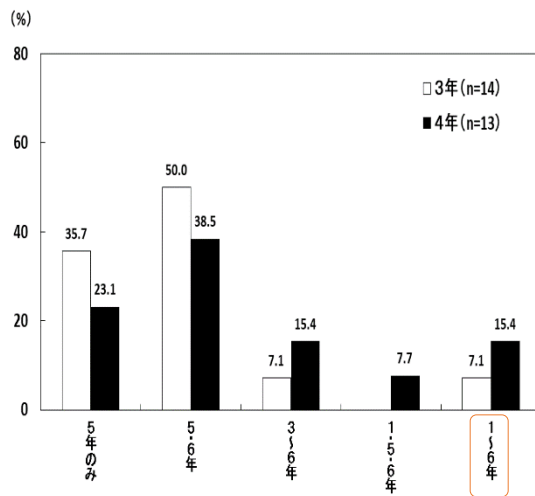


図 12. 食品・栄養バランスにおける回答分布率

5.2 小学校教育実習期間中の給食指導および見学経験の有無との関係

給食指導に関わる項目は、それぞれ発達段階に応じて行う必要がある。そこで、小学校における教育実習中の給食指導の実施または見学経験の有無が、発達段階を考慮した給食指導につながっているか検討した。その結果、両者に有意差は得られなかった（図 13）。その理由として教育実習では配属学年が1つに絞られるため、各学年での指導の様子を見学できないことが挙げられた。

さらに学生が「給食指導」をどのように捉えているのか把握するために、給食指導の内容について複数回答により、回答してもらった。選択肢を「給食指導」や「食に関する指導」に関する項目とそれ以外（誤答）も含め20項目提示し、当てはまるものを全て選んでもらった²³⁾。その結果、その正答率にも指導経験の有無や見学の有無による差は見られなかったが（図 14）、給食指導を「学級独自の取り組み」と誤解していた者が、教育実習期間中に指導・見学が無かった者より、指導・見学どちらも有る者、もしくは指導のみ経験ありの方が有意に高かった（指導・見学有 VS 指導・見学無 ($p < 0.01$), 指導あり・見学無 VS 指導・見学無 ($p < 0.03$)). この結果は、教育実習における給食指導の課題として、「指導内容の偏りが見られる」と回答した学生がいることから²³⁾、給食に行われる指導を学級担任に一任している影響や、実際に自分が指導する際に、給食指導における学校の統一したマニュアルなどが無かったためと考えられた。

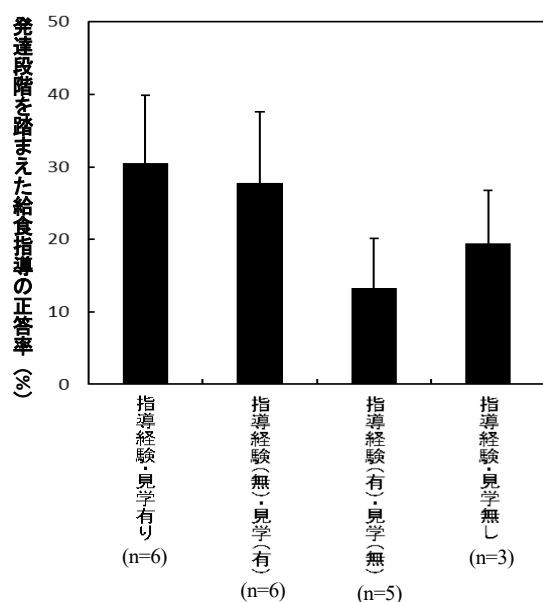


図 13. 発達段階を踏まえた給食指導の正答率
(小学校教育実習者のみ)

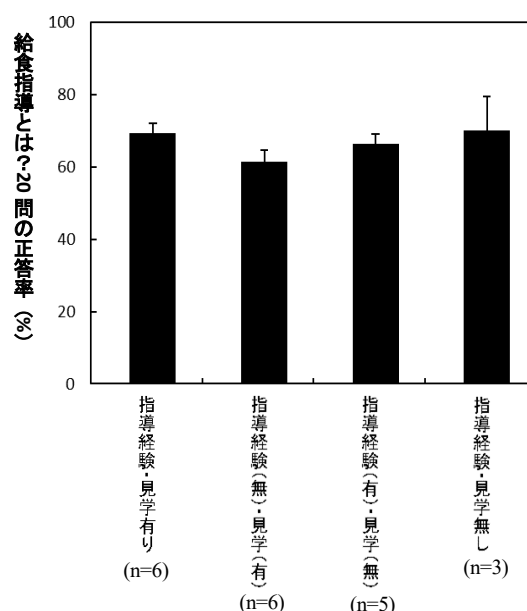


図 14. 学生における給食指導の捉え
(小学校実習教育実習者のみ)

6. まとめ

本研究では、「給食の時間における食に関する指導」について、学問的な位置づけ特に発達段階との関連を考慮しながら指導体制を検討し、実施できる力を身につけることを目的として、食に関する知識のある家庭科教育専修の学生を対象にアンケート調査を行い、現状の把握を行った。その結果、「給食の時間に行う指導」への理解が不足していること、発達段階を考慮した指導や習慣化の意義が理解されていないことが明らかとなった。また、教育実習中の給食指導の経験や見学経験は、「給食の時間における食に関する指導」への理解に結びついていないことも示された。

これらの背景には、「給食の時間における食に関する指導」が学級担任に一任されていること、担任も自身が内容を理解していない可能性があること、教員養成課程で学問としての体系的な学びの場が無いことが大きく影響していると考えられる。つま、多くの報告と同様に、教員養成段階での学校給食に関する学びの場を提供することが必須であることが示された。「給食の時間における食に関する指導」の内容は多岐に渡ることや発達段階に応じて行う必要があることから、単発的な学びではなく、15 回を通した体系的な学習が重要であり、新たなカリキュラムを早急に提案していく必要がある。

本報告では「給食の時間における食に関する指導」について学童期の発達段階を考慮した指導項目の整理を試みたが、目標設定までに至らなかった。

そのため、今後は、発達段階ごとの詳細な目標設定を行っていく。これにより、目標を達成する指導法が確立していくことができると考えられる。教員養成段階における新たなカリキュラムを提言していくためにも、発達段階ごとの詳細な目標設定を行うことは急務の課題であると言える。

参考・引用文献

- 1) 新保みさ 他 (2017) 小学校における学級担任による給食指導—栄養教諭・学校栄養職員と相談している教員の特徴— 日本健康教育学会誌 25 (1) pp.12-21
- 2) 磯部由香 他 (2017) 小学校における給食指導の現状と課題 三重大学教育学部紀要 68 pp.143-148
- 3) 原千尋、河村美穂 (2014) 小学校低学年における給食指導の特徴 埼玉大学紀要 63 (1) pp.47-57
- 4) 生島博之 (2010) 給食指導に関する教育臨床学的研究 愛知教育大学教育実践総合センター紀要 13 pp. 217-224
- 5) 布川和恵 (2014) 教育課程における学校給食指導の変遷 現代社会文化研究 59 pp.83-100
- 6) 鈴木洋子 (2015) 教員養成課程における学校給食に関する指導の必要性 奈良教育大学紀要 64 (1) pp.155-159
- 7) 鈴木洋子 (2013) 教員養成段階における学校給食に関する指導内容の検討 奈良教育大学教育実践開発研究センター研究紀要 22 pp. 96-99
- 8) 上田由喜子他 (2014) 教員志望学生の食育に対する意識 日本食育学会誌 8 pp.181-189
- 9) 文部科学省 (平成 22 年) 食に関する指導の手引-第 1 次改定版- p.183
- 10) 文部科学省 (平成 31 年) 食に関する指導の手引- 第 2 次改定版- p.21, pp.223-226
http://www.mext.go.jp/a_menu/sports/syokuiku/1292952.htm - (2019. 11. 8 取得)
- 11) 厚生労働省 (平成 16 年) 楽しく食べる子どもに～食からはじまる健やかガイド～
食を通じた子どもの健全育成の在り方に関する検討会 報告書 pp.7-15
<http://www.mhlw.go.jp/shingi/2004/02/dl/s0219-4a.pdf> (2019. 11. 8 取得)
- 12) 野邊政雄、岡本真衣 (2011) 学校給食における児童の食行動の変容と食事観の形成に関する研究動向 岡山大学大学院教育学研究科研究収録 147.pp.63-67
- 13) 鈴木洋子 (2018) 小学校初任者研修の手引き等における学校給食・給食指導の扱い
次世代教員養成センター紀要 4 pp.223-227
- 14) 藤本浩一 他 (2019) 読んでわかる児童心理学 サイエンス社 pp.218-221
- 15) 山内知子 (2010) 食育の観点からみた箸の持ち方と食事マナー 日本調理科学会 43 (4) pp.260-264
- 16) 向井由紀子、橋本慶子 (1977) 使いやすい箸の長さについて 家政誌 28 pp.467-466
- 17) 伏見亮 (2013) 『味覚と嗜好のサイエンス』 丸善社 p.40
- 18) 心理科学研究会 (2017) 『小学生の生活とこころの発達～第 7 版～』 福村出版 p.44
- 19) 古島そのえ、金子佳代子 (2006) 小学校 1 年生児童の学校給食における食行動の観察
横浜国立大学教育人間科学部紀要 I 教育科学 8 pp.15-31
- 20) 小川晶子、中川弥子 (2017) 食嗜好の発達に関する研究—短期大学生を対象としたアンケート調査— 長野県短期大学紀要 72 pp.33-39
- 21) 東山幸恵、今村光章 (2010) 給食時における学童の食行動観察の試み—栄養教育の立場から bite 数・非摂食行動・摂食構成に着目して— 岐阜大学教育学部研究報告 教育実践研究 12 pp.139-149
- 22) 向井美恵 (2009) 食べ方から奨める小児期の食育 小児歯科学雑誌 47 (1) pp.1-7
- 23) 村上陽子、竹下温子 (2019) 教員養成課程の大学生における給食指導に対する認知と教育

実習での学びの実態と課題 (第1報) 静岡大学教育学部紀要 教育編印刷中